

### 3. 野田や井出、森たちと小谷兄弟、A. M. アーレン

1895（明治28）年、モントレイにおいて野田音三郎は森林伐採事業だけでなく、翌年漁業に関心を示し、とくに採鮑業をおこなうために農商務省に手紙で専門家依頼の相談をしたといわれる。また、野田とともに採鮑業に取り組もうとした井出百太郎も、磯部水哉の伝で農商務省に専門家派遣の依頼をしたという。これらのことは後にアメリカ・カルフォルニアへ移民した人びとの紹介やカルフォルニアの日系人移民史する書籍に書かれているだけで、日本政府の農商務省関係や大日本水産会などの資料で裏付けるものは今のところ見つかっていない。

これまで野田音三郎や井出百太郎、森（護）俊肇に関わって、あまり取り上げられてこなかった資料や出来事を紹介したい。まず野田は1901（明治34）年の『会報』12月号によれば、大日本水産会の海外からの10月入会者として紹介されている。音三郎の名が「音次郎」となっているが、『官報』や書籍のなかで「音次郎」とするものも見受けられ、ただの誤植とも思えない。野田が1901（明治34）年10月にわざわざ大日本水産会の海外会員となった意図はどこにあったのだろうか。当時、開墾事業を続けながら1898（明治31）年からモントレイ湾で本格的な漁業を開始し、当初から井出百太郎と共同経営しながら、採鮑は小谷兄弟らが担って乾鮑など加工品の製造に取り組んでいた。前述したように何らかの理由で2人は分裂し、1900年（明治33）年の『官報』にも井出と野田の鮑漁場に分かれ採鮑していると記載されている。その後、マルバスと共同して鮭と鮑の缶詰製造のため、モントレイ水産缶詰会社を1902（明治35）年に設立するが、その前年に大日本水産会の海外会員になったのは、排日の動きが強まるなか缶詰類の製造・販売など本格的な水産業への進出を図るために、調査研究や水産貿易の情報など日本の水産界との繋がりを求めたからかもしれない。

ところで、野田や井出から鮑専門家としての依頼を受け、1897（明治30）年9月に小谷源之助は渡米し、彼らのもとでパシフィックグローブを中心にモントレイ半島周辺の鮑調査を開始した。この頃、A. M. アーレンは、経営難のカーメルランド石炭会社が所有する休鉱の再採掘調査を依頼され、モントレイ・ポイントロボスに出向いている。その調査結果は、今後の鉱山再興は無理であると判断され、カーメル石炭会社はポイントロボスの所有地を手放すことになる。そして、その年12月には弟の仲治郎が山本林治・安田市之助・安田大介の3人の海士とともに渡米し、素潜りでの採鮑をはじめ、源之助などとともにホエラーズ湾周辺のポイントロボスでの鮑調査をすすめた。

翌98（明治31）年1月、カーメルランド石炭会社が手放したポイントロボスの土地64エーカーは、アーレン自身が購入することとなった。ただ新聞記事ではアーレンが鉱山を借り受け、ポイントロボスとカルメリト市として分譲された地域を含む640エーカーを購入したと記載されている。翌月にはカルメリトの道路を整地し、砂利を敷き詰めるとともに、夏にはカーメル湾を見下ろすポイントロボスに石造りの家屋を改築し、後にアーレン一家5人はポイントロボスに移住する。

この年の2月頃、井出百太郎経営の井出商会がカーメル湾域に出先の水産部を持ち、ポイントロボスで素潜りによる採鮑業と乾鮑製造を始めたものと思われるが、A. M. アーレンがポイントロボスの土地所有者になったことで、カーメル湾ポイントロボス沿岸での採鮑をするにあたって井出や小谷兄弟は、アーレンに挨拶をして理解を求めたはずである。とくに採鮑に関してアーレンは小谷兄弟と交流するなかで興味関心を持ち、実際に採鮑体験をしたのではないだろうか。

6月には、日本に帰っていた井出が磯部水哉とともにポイントロボスに戻っているが、日本滞在時に井出と磯部が何をしていたかは不明である。磯部はかつて乾鮑の清国輸出に関わったとされる人物で、井出が進める乾鮑売買契約の交渉にいったのではないか。実は『銀行会社要録』（東京興信

所・明治30年)によると、前年の97(明治30)年12月に井出百太郎と磯部水哉、そして護俊肇、森田源右衛門によって「合資会社丁酉商会」が東京日本橋元大工町1番地に設立され、営業目的は雑貨及食料品売買と記載されている。『日本商工営業録 明治31年9月刊(第1版)』にも記載があり、磯部が代表になっている。この会社のことはこれまで知られていなかったが、『在米日本人史』(在米日本人会・昭和15年)にサンフランシスのデュポント街に同名の会社があり、東京の会社との関係は不明であるが、サンフランシスは支店であった可能性もある。井出などはモントレイで製造した乾鮑をいったん日本に送ってから清国へ輸出する形をとるために会社をつくったのではないかと推察している。

9月には、井出商会水産部からの依頼で、七浦村千田から3名の海士(栗原石松・早川千之助・山口次郎松)がポイントロボスに到着すると、すでに採鮑している3名の海士たちと合流し、井出商会水産部は素潜りの採鮑から器械式潜水による採鮑に移行していったと思われる。

11月26日付の地元新聞『モントレイ・サイプレス』(以下、『サイプレス』紙と略)によると、この年にシャウフェレ・ブラザーズという会社から捕鯨部門を買収した日本の会社があり、カーメル湾周辺には鯨が多いので、A. M. アーレン所有のポイントロボスの土地を捕鯨基地として借りているという内容であった。翌年の11月8日付の地元新聞『モントレイ・ニュー・エラ』(以下、『エラ』紙と略)にも、特定の時期に捕鯨をおこない「日本の捕鯨船、操業開始」との記事がある。この頃、日本人で捕鯨に関わったのは、森(あるいは護)俊肇経営の森合名会社と思われる。アーレンは森合名会社の捕鯨のためにポイントロボスの土地を貸していたが、捕鯨の時期以外は、アーレン自身が小谷兄弟との交流のなかで採鮑業に興味関心をもっただけでなく、本格的に副業として取り組むことを決めたのではないかと推察している。1898(明治31)年の初め、アーレンと小谷兄弟との出会いがあつて、その後ポイントロボスでの採鮑業や缶詰製造の共同経営が誕生するきっかけになる。この出来事はあらためて「5. ポイントロボスの採鮑業と鮑缶詰会社」のなかで述べたい。

翌99(明治32)年になると、採鮑業のことでは様々に問題が広がるとともに、水産加工の面では地場産業として度々話題にあがった。サクラメントでは2月に鮑漁を制限する法案提出され、漁期を限定し販売を禁止し、採取したものは16インチ以上でなければならないとされた。同じ時期の『エラ』紙(2月22日付)をみると「漁業保護のための措置」として「フェリス下院議員は…2つの法案を議会に提出…その一つは、中国や日本の漁師が鮑を採る際に用いる無駄な方法による鮑の絶滅を防止する…」との記事がある。

一方、3月1日付の『エラ』紙には「鮑缶詰工場設立へ〜モントレイに住んでいた人が、歯ごたえのある魚の缶詰を提案」と、オークランドのJ. W. ギエッティがモントレイに缶詰会社設立との記事や、『イブニング・センチネル』紙(3月4日付)にも同様に、オークランドの鮑食品会社のJ. W. ギエッティがモントレイに鮑缶詰会社を設立する準備をし、缶詰工場を移転する計画があるとの記事が掲載された。オークランドのギエッティ兄弟会社(ジョセフとエドワードの兄弟)が、ポイントロボスに缶詰工場を移転する理由は何か。まずモントレイ南方地域に多量の鮑生息と高い鮑生産の可能性あること、またエドワードがかつてモントレイの南方に住んでいたこと、さらにオークランド市民であったアーレンとギエッティ兄弟は知り合いであった可能性があり、アーレンがポイントロボスに移住後も交流があつたのではないかと推察している。また、ギエッティ兄弟については、新聞報道だけでありほとんど不明のままである。小谷兄弟とギエッティ兄弟はアーレンを通じて鮑生息の調査研究や缶詰製造など調査研究の面で、あるいは技術者的な立場から何らかの交流があつたのではないかとみている。というのもギエッティが新聞記事のなかで採鮑

業規制に関わる日本人漁民の調査研究を評価していたからであり、それに関わって小谷仲治郎のことは知っていたと思われる。

議会で「鮑の絶滅を防止する」との動きが活発になっていく状況のもとで、6月には『エラ』紙（6月28日付）において本格的なキャンペーンが始まり、社説的な記事「鮑を絶滅させる」が掲載された。「…数ヶ月前に日本人の会社が来て鮑漁を始めた。潜水服が使用され、倭約家の日本人は鮑を集めて大儲けしている…監督当局は貴重な食用魚が絶滅するのを防ぐために、直ちに対策を講じるべきである」という内容であった。